

哲学・思想の基礎

学部共通科目(2017年度)

第12回 倫理的な正しさとは
何か **リバタリアニズムの立場**

質問に対する解答

リバタリアニズムの政策介入への批判について

- リバタリアニズムについて学んだ。だがその中で疑問に思ったことがある。なぜリバタリアンと呼ばれる人は公的な政策介入を批判する理由がよく分からないことだ。まず意図的でない制約または強制ならばそれは自由の侵害とは言えないのではないか？例を上げるとすると、世間の因習とか暗黙の了解などといったものは、直感的に考えて個人の侵害とはいえない。是非説明をお願いしたい。

- 世間の因習とか暗黙の了解などは、意図的な制約や強制ではないですが、個人の自由(所有権としての自由)を侵す、とりバタリアニズムは考えます。意図的であろうとなかろうと、個人を何らかの形で強制するような政策にはリバタリアニズムは反対します。

リバタリアニズムの所有権について

- リバタリアニズムにおいては、自由が所有権によって規定される。したがって、税金もこの立場からすれば否定的である。国家が納税を望まない者からも税金を集めているという点で金銭所有者から自由を奪っているという。税金がもしなくなつたとして、貧困層と富裕層の格差は大きく広がってしまうのではないか。これは、国家の干渉しない正式な自由取引によって解決される。要は、贈り物や物々取引

をうまく活用すれば分配がなされ、平等がうま
れるということだ。(以下略)

- リバタリアニズムは上の疑問に下線のように答えますが、これは実際は不可能でしょう。再分配が善意によって贈り物や物の交換でなされるような社会では平等が生まれますが、現実の社会では難しく、このようなことは税制や社会保障政策によって可能とされます。

パターナリズム(ヘルメット着用義務)の拒否について

- 今回の授業で、リバタリアンの考えの1つとして、パターナリズムの拒否があげられていた。この考えの例に、オートバイに乗る際のヘルメットの着用は第三者に危害が及ばない限り国が規制すべきでないとした。しかし、人に迷惑や苦勞をかけた場合の危険行為も規制されるべきではないだろうか。例えばオートバイで電柱にあたり、ヘルメットを着用しなかったことによる植物人間状態になった場合、その

人の世話や入院費の捻出をしなければならなくなる。またその人が抜けた分の仕事をやる人の手配をしなければならなくなる。このように1つの危険行為によって第三者に危害がなくとも、大勢の人に迷惑や苦勞をかけてしまうことになる。このことから私は迷惑や苦勞をかける危険行為も規制すべきとし、リバタリアンのパートナーリズムの拒否に反対である、と主張する。

- オートバイの事故で自分だけが被害者で、誰にも迷惑をかけていないと言うことはできません。実際には多数の第三者(家族、友人等や関連する多くの人)に迷惑をかけています。このような人間の繋がりを特に強調するのは、次に扱うコミュニタリアニズムです。

- サンデル[の解説]によれば、多数派のもつ美德の概念を押しつけるような法律にリバタリアンは従わないとしている。この点で、もし命を守るためのヘルメット着用の義務が無かった場合、果たしてどれだけの人がヘルメットを着用するか疑問を持った。法律で定められていなければ、わざわざそれなりに値段のするヘルメットを買う人はいない。国家は、国民の生命を保障することが根底にある。

その国が、国民の命のリスクを選ぶ権利を侵害するからといって法律で定めないというのは、国家が存在する意義と矛盾する。例えば、ヘルメットを着用しなかった本人が単独の自損事故を起こし、死亡した場合のことを考えると、すべての責任をその人のものとしてしまうことは、すなわち国がその人の命を保障していないことになのである。

- 善い指摘です。リバタリアンは国家はそこま
で国民の生命を保障する必要はないと考え
ます。この批判の論点は基本的にコミュニタリ
アニズムの観点につながります。

ロスバードの生命倫理について

- …この理論は、人間が自分自身の体に対する権利も持ち、自分の行為を自分で完全に決める、というイメージが強い。また、「生命倫理」に関して、母親の子宮の中に子供は存在しているから、母親には絶対的な支配権がある、ということだった。確かに、子供は母親の体内、子宮にいるが、この「子供」とは、母親とは違う、父親のDNAも持つ、母親とは別の「個人」である、とみなせるのではないだ

ろうか。このことから、子供も自分の「人身の自由」を持ち、母親が追放する権利を完全には持つことができないのではないだろうか。

- ロスバードは所有権を基盤とした個人を尊重していたはずなのに、胎児を個人と見なさないどころか、「侵略者」、つまり外敵のように見なしてしまっている。この矛盾は、一般に人々が“目で見て”認識できないヒトをヒトとしてとらえないという考えがロスバードにあったからこそ生じたのだと思った。ヒトと断定できない以上、胎児<母親というように権利に優先順位が生まれるか、そもそも胎児には権利すら

与えられなかったのだろう。そうでなければ追放するという表現はしないだろうし、恐らくだが赤ん坊が産まれたとして母親が赤ん坊を殺害しようとする場合、それは罰せられる行為だとロズバードは考えるだろう。あくまで胎児を母親のモノとして考えているのだろうが、それはあまりにも残酷すぎる。

- まずここで「子供」と言っても「胎児」が問題となっていることに注意する必要があります。生命倫理にはいつからヒトは人となるかという論争があります。受精の瞬間から人が産まれるというカトリックの考え方から、受精後の時期を区切って人と認める考え方までさまざまです。胎児のDNAを考えれば、別の個人と言えますが、ロスバードは胎児を人と認めていませんので、母親の所有物となるのです。さらに生命が尊重されるのは人格(パーソン)のみだという考え方もあります(パーソン論)。

フリードマンの思想について

- フリードマンの国民を「自由人」とする考え方は現代社会の民主主義の元となっていると思った。できる限り政府の権力を分散させることによって、国民が政府の権利〔権力〕におさえつけられないようにする。国民が自由に生きていけるように法と秩序を維持し、国外からの侵害を防ぐ。最低限の仕事はするが、必要以上に国民に干渉しない。これは、市場においても同じような考え方であり、「競争資

本主義」をフリードマンはかかっている。政府が需要や供給に干渉することなく、民間企業や個人が各々で自発的に交換し合う。そうさせることによって、国民にとって最も望ましい市場のカタチが自然に形成されてゆくのだと思う。いま一度、政府と国民の関係を見直してみる必要がある。

- 今回の授業では、フリードマンの「道具としての国家」の考え方が面白かった。その中で「自由人は国が自分に何をしてくれるかを問わない。自分が国に何をできるかも考えない。その代わりに、自分の責任を果たすため、自分の目標を・・・<中略>・・・政府という手段を使って何ができるかを考える。」という部分が特に印象的だった。もしフリードマンのこの考えが正しければ私たちは自由人ではない。

現代では、政府は手段ではなく、政府が私たちより権力をもち、政府が私たちを手段としているように感じる。特につい先日採決された共謀罪については、自由でなければならないはずの表現の自由が政府によって制限された。テロから私たちを守るという点は、フリードマンの考える政府の役割に当てはまるかもしれないが、この法律は“テロから私たちを守る”という枠をこえるように思え、それ以上の目的さえ私たち国民に想像させる。フリードマンの考える自由人から私たちは遠のいていく一方である。

- フリードマンに極めて好意的な意見ですが、フリードマンの考え方からはかなり外れてしまいます。フリードマンは、リベラリズムのように個人の権利をまず重視するのではなく、主に経済活動を自由に行う人間(むしろ経営者)の立場から自由を考えています。自由な競争を規制なしに行うのが「自由人」です。共謀罪に関しても、経済活動を妨げない限り、反対しない(無関心)でしょう。逆に、リバタリアニズム(特に新自由主義)が保守主義と結びつくとき、むしろ共謀罪に賛成するかもしれません。